日本の女性ポップカルチャー研究
――セクシュアリティに注目して

ルーシー・グラスプール
（訳・甲斐 清高）

序論　女性ポップカルチャー研究

女性のポップカルチャー、特にエンターテインメント・カルチャーは、長いあいだ、一般人の意識においてもアカデミックな世界においても軽視され、軽薄で研究に値しないとされていた。英国のサッカーファンと、ボーイバンドのファンを例にとってみよう。英国サッカーは伝統的に各世代の男性をターゲットにしており、議論の余地なく、「正常な」娯楽、男同士の絆の象徴であり、伝統的な男性性の中で通常は抑圧されている感情の捌け口となっている、と見なされる。他方、ボーイバンドのファンは大部分が若い女性によって占められており、サッカーファンと同レベルの情熱・献身を作り出しているにもかかわらず、そのファン――《ビートルズ》から《ワン・ダイレクション》まで――は、「ヒステリック」とか、「子供っぽい」とか言って嘲笑されている（Mendelsohn, 2014）。どちらのファン界もコミュニティとして機能し、感情表出が――さらには性的欲求の形成さえもが――助長される空間となっている。しかし、メディアの言説において両者は異なった扱いを受けている。サッカーファンは認められ、ボーイバンドのファンは無視されているのだ。これは性差に負うところが大きい。そして、比較的最近になってやっと、ジャーナリズムやアカデミズムの世界でも、ボーイバンドやアイドルが真剣に取り上げる価値のあるものだと考えられるようになった。テレビドラマやゴシップ誌、ロマンス小説など、伝統的に女性をターゲットにしているポップカルチャーの他の分野についても、長年、同様の烙印が押されていた。

日本のポップカルチャー研究史全般についても、似たような態度が見られる。マンガやアニメのような文化形態に学術的関心が向けられたのは一九八〇年代になってからのことであり（Schodt, 1983）、欧米の学術研究で実際に扱われ始めたのは一九九〇年代である（Allison, 1996; Schodt, 1996）。日本の大学や資金提供団体が、こうしたメディアを研究に値する対象と見なすようになるには、さらに数年を要した。しかし、その後、日本のポップカルチャー研究は豊かで多彩な研究分野へと花開き、日本の主要大学のほとんどで、そして海外の多くの大学において、この分野に関するコースが提供されている。そして、女性による女性のためのポップカルチャーに関するこれまでの学術研究で、どの研究が主要な貢献なのかも明らかになっている。

二〇世紀後半までに女性の購買力が上昇したという事情もあり、現在では日本の各世代の女性をめぐるポップカルチャーの作品、活動、受容を探究する研究が数多く見られる。英語で書かれた初期の研究は、青山友子による少女マンガにおける男性間セクシュアリティの研究（Aoyama, 1988）のように、日本人研究者によるものだ。また、シャロン・キンセラ（Kinsella, 1995, 2000）やレイチェル・ソーン（旧名マット・ソーン）（Thorn, 2001, 2004）といった欧米の研究者からも多くの貢献がある。こうした研究により、社会や日常生活における不平等や抑圧に抵抗する手段、あるいはそこから逃避する手段として、日本人女性がポップカルチャーを利用している、という興味深い状況が明らかになっている。もちろん外国人研究者は、長期間日本に住み、日本で研究している人でさえ、多少とも日本以外の社会文化のレンズをとおして研究対象を見ることになる――それはそれで、新たな観点を提供したり、日本のポップカルチャーを海外のコンテクストにおいて検証したりするという意味で、有意義なものではある。幸い、アイドル文化におけるジェンダーを研究している青柳寛（Aoyagi, 2005）や、女性向けマンガとその読者を対象にする長池一美（Nagaike, 2013, 2019）など、多くの日本人研究者による貴重な見識のおかげで、英語の研究文献に深みが増している。この分野へは、人類学、社会学、メディア研究、映画研究、ジェンダー・セクシュアリティ研究、地域研究、心理学など、多様な研究領域からのアプローチが見られる。「日本の女性ポップカルチャー研究」がまだ比較的特殊な研究分野であるために、こうした多様な領域をまたいで研究者たちが意見交換することも多い。そのため、研究者であれ、学生であれ、研究文献を読めば、様々な観点からこの分野を眺め、全体的に理解することができるだろう。

日本の女性ポップカルチャーに関して、世界の学術界のなかで特に注目されている側面がいくつかある。「カワイイ」文化とその世界的拡大（Miller, 2011; Kinsella, 1995; Koma, 2013）、ロリータなどのファッション・サブカルチャー（Miller, 2011; Kinsella, 1995; Koma, 2013）、男性アイドルのファンによるテクストおよび活動（Darling-Wolf, 2003; Nagaike, 2012）、宝塚歌劇団（Robertson, 1998; Yamanashi, 2012）、そしてもちろん、少女向け、女性向けのマンガ、アニメ、ゲームなどである。

こうした分野のいくつかを視野に入れて、本稿では特にセクシュアリティ（性的志向、性的欲望どちらも含む）に関わる研究（日本人、外国人両方の研究者を含むが、主に国際的な場で、英語で発表されたもの）に焦点を当てる。女性セクシュアリティ研究が新しいというわけではない。リンダ・ウィリアムズのポルノグラフィーに関する画期的な研究（Williams, 1989）で論じられているように、歴史的に見ると、女性のセクシュアリティ研究がかつて目指していたのは、女性の発言、行動、感情について、どのようなものが「適切」で、どのようなものが「不適切」なのかを規定することだった。女性による女性のためのポップカルチャーをとおして見る《女性の快楽と欲望》の本格的調査はもっと新しく、これが広く行われるようになったのは一九九〇年代になってからである。本稿ではまず、女性とセクシュアリティに関して、研究対象となっている興味深い日本のポップカルチャー形式を概観し、その後、「ボーイズラブ（ＢＬ）」として知られるマンガや同人誌、ゲームの恋愛ジャンル／性的ジャンルをめぐる学術研究の動向を検証する。学術研究の中で、ＢＬは現代日本女性文化の顕著な例として扱われている。男性同士の恋愛関係、性的関係を扱うＢＬのテクストは、女性の快楽や女性の抱える問題について、実際に多くのことを露呈していることが分かってきている。

日本女性のポップカルチャーとセクシュアリティの概観

主に女性によって、女性のために作られるポップカルチャーの領域には、少女・女性が現実に、あるいは想像上で、セクシュアリティを探検し、セクシュアリティと戯れる空間として論じられているものがある。このセクションでは、音楽やパフォーマンス（特に男性アイドルグループと宝塚歌劇団）のファン、女性向きの実写ポルノグラフィー、「レディ

コミ」や「ガールズラブ」、BLといったマンガやアニメのジャンルをめぐる論点を概略的に紹介する。（BLについては、後でもっと詳細に検討する。）こうした領域への学術的な研究によると、美意識と魅力、ロマンス、セクシュアリティ表現における遊び心という点で、顕著な共通性が見られる。

十代のファンがキャアキャア騒いでいる、といったイメージを持つジャニーズのような男性アイドルの研究を、もっと成熟したファンのイメージを持つ宝塚と同じ枠にはめてしまうのは不適切であるように思えるが、実は多くの共通点がある――大部分が女性の十代から中年までのファン層（男性がいないわけではない）、音楽とダンス・パフォーマンスの重視、女性に「理想の男」というファンタジーを与える機能。この「理想の男」は、伝統的な理想の男性像ではなく、女性の嗜好が作り出す欲望の対象である。ジェニファー・ロバートソンの有名な宝塚の研究（Robertson, 1998）では、男役の「性的だが性のない（セックスレス）」（p. 81）役割が分析されている。両性具有である男役は、女性ファンが実際にレズビアン願望というレッテルを貼られ、反社会的と見なされる危険性を伴わずに、同性愛の可能性を楽しむことを実現している。同時に、男役の人物造形、そして、男役と娘役キャラクターとの関係を通して、女性ファンは「理想の男」――ロマンティックで、思いやりがあり、優しく、美しい男――との異性愛的出会いを夢見ることもできる。

これに似た男性イメージが、男性アイドルにも見られる。《嵐》のようなグループに関してメディアが提示するイメージは、思いやりがあり、家庭的で、「カワイイ」、そしてロマンティック、といったものだ。所属事務所がアイドルたちを「独身で手が届く」という風に見せようとするから、ますます宝塚の男役との類似が強くなっている。こうして、男性アイドルは、ただ漠然とだけ男となっているのだ。そして、アイドル同士の「スキンシップ」のような技法を通して両義的なパフォーマンスを行うために、女性とではなく、男性アイドル同士で性的関係を持つ姿を描くという同人誌のサブジャンルが存在するに至っている（Glasspool, 2012）。さらに、長池によると、男性アイドルはふつう大人の男性というよりも《少年》という枠にはめられるため、男役と同じく「男でも女でもない」空間、性差の曖昧な空間を占めている（Nagaike, 2012, p. 104）。このような空間では、女性ファンが想像上で、（対象の、そして自分自身の）様々な性的志向、性的欲望と戯れながら、自らの現実世界ではその結果を負わないでいられるのだ。

研究対象となっている第二のポップカルチャー形式は、いくらか本流から逸れた領域であり、現在でも日本女性にとってタブーとなっている話題、ポルノグラフィーである。もちろん、エロティックな表現は、アイドルの同人誌からレディコミやBLアニメまで、女性ポップカルチャーの多くで不可欠な要素となっている。しかし、日本における女性向け実写ポルノグラフィーは市場を拡大しているにもかかわらず、それに関する議論には沈黙が保たれている（Hambleton, 2015）。女性の積極的なポルノグラフィー使用に関する初期の研究で、ジェイン・ジャファーは、女性ポルノ研究が「ポルノグラフィーを『異常』なもの――ジェンダーロールを覆したり、偽善を暴いたりする特別なもの」として扱う傾向があると教えてくれる（Juffer, 1998, p. 20）。他方、多くの女性が日常的な目的で――空想に耽ったり、肉体的満足を得たりするために――ポルノを利用しているかもしれない。露骨なBLのような性的娯楽の研究の多くは、性的刺激という機能そのものよりも、潜在する反体制的な力を強調しようとする傾向がある。しかし、日本において、女性自らが性的欲望を表明することが（男性にその表明を求められるケース以外では）ずっと避けられているという現状を鑑みると、女性が「イキたい」という欲望で――生殖のためでも、男を満足させるためでもなく、自分自身が満足するために――ポルノを消費することは、それ自体、伝統的ジェンダー規範に対する挑戦が具現化したものだと言えるかもしれない（Jones, 2005, p. 106）。それゆえに、内容の分析だけではなく、情動機能という面から女性向けポルノを精査するのが重要だろう。

そうは言うものの、日本の実写ポルノが女性に対して果たす機能につ

いて、研究者たちの立場を評価するのは難しい。現在のところ、研究が少ないのだ――研究が少ないこと自体、大きな意味を持っているのだが。しかし、カタリーナ・ヘルムによるオンライン女性ポルノ映画に関する調査では、ここで論じている他のポップカルチャー形式と、様式・物語において共通点を持つことが示されている――「日本の超人気ボーイバンドと見分けがつかない」容姿端麗な「エロメン」俳優（Hambleton, 2015, p.432）、感情と恋愛の重視、挿入される側の人物の快楽、女性を対象化するのではなく男女双方に等しくフォーカスを当てる視点、女性の多様な妄想に対する暗黙の了解、新たな性的志向の探求（Helm, 2017, p.51）。アレクサンドラ・ハンブルトンは同じような映画を分析しており、また、女性向けポルノ制作会社が企画したファンの集いが、女性による性的眼差しという考えを一般化する役割を果たしていると論じている（Hambleton, 2015）。しかし、女性ポルノが実際にどのように使用されているか理解を深めるには、特に表象されている行為や情動に関して、この分野のさらなる調査が必要だ。

上述した女性向けポルノ映画の特徴はまた、レディコミ、ガールズラブ、BLといった女性向けマンガのジャンルにも見られる。中でもレディコミは、典型的な実写ポルノに最も近い。十代後半以上の女性をターゲットにし、主に男女の関係を描くレディコミのマンガは、露骨に性的な内容を含んでいるものが多い。レディコミを特徴づける幅広いサブジャンルやストーリーは、少女マンガよりも少し現実的だという傾向がある。一九九〇年代、女性のセクシュアリティをめぐって道徳的批判が起こり、そこから猥褻、低俗というニュアンスが強くなったため、マンガ業界では「レディコミ」という呼び方は廃れてしまい（Jones, 2005）、現在ではもっと一般的な「女性マンガ」が使われている。ここにはBLも含まれる（Ito, 2002）。ただし、セクシュアリティの研究においては、ふつうの女性向けマンガには含まれないレベルの性表現を示すという意味で、「レディコミ」という語は役に立つだろう。

このタイプのマンガに関してもまた研究は数限られているが、それら少数の研究は、女性の欲望が肯定される性的ファンタジーの場としてのレディコミの役割を強調している。女性のオーガズムが中心的で重要なものとして示されるが、マンガの線描イメージには視覚的限界がないために、「映像では捉えられない女性身体の別の真実」を描くことが可能となる（Shamoon, 2004, p.78）。もっと批判的に、レディコミにはエロティックに描かれる性的暴行が頻繁に現れる点を強調する研究者もいる。女性向けの実写ポルノについてヘルムが指摘している（Helm, 2017）のと同じで、女性の作り出す妄想レイプが、女性蔑視社会を反映しているのか、女性が性的に積極的であることを許さない文化において、抑制からの「解放」を表現したものなのか（Fujimoto, 1992; Shamoon, 2004）、それとも、女性ポップカルチャーにおけるセクシュアリティの能動的実験の一環として、「遊び心」を示しているだけなのか、という問題提起がなされている（Jones, 2005; Okabe & Pelletier-Gagnon, 2019）。全般的に見て、学術研究において、レディコミは女性の積極的なセクシュアリティの表現と見なされているが、その一方で、このジャンルが持つ猥褻性・低俗性は批判されているようだ。

マンガやアニメにおいて、十分に研究されていないジャンルとして、もうひとつ挙げられるのは、「百合」とも呼ばれるガールズラブである。女性同士の恋愛関係、性的関係を描くマンガは、男性読者に向けたもの（定着したエロマンガジャンルの一部となっている）と、女性読者に向けたものに分けられる。女性向けの起源は、明治時代後期・大正時代の女性同士の恋愛を扱う雑誌や小説に見られ、また、『リボンの騎士』（手塚治虫、一九五三―五六）や『ベルサイユのばら』（池田理代子、一九七二―七三）など、ジェンダーが曖昧な主人公を擁する初期の少女マンガにも起源を持つ。（女性による）女性のための百合マンガに関する学術研究は、先に論じた他のポップカルチャー形式の場合と同じ特定テーマに焦点を当てている。つまり、テクストの中、および読者の受容の中に見られる性的両義性と性的遊戯性の感覚である。

長池一美の指摘によれば（Nagaike, 2010）、百合マンガは若い女性同士

の愛を描くことによって、異性愛規範（ヘテロノーマティヴィティ）に異議を唱える一方で、はっきりした「レズビアン」のレッテルを避けている。百合マンガ研究における一貫したテーマのひとつは、どの程度、百合マンガを「レズビアン」マンガと呼ぶことができるのか、という問題である。特にここ数年の間、自分がレズビアンであると公言する作者や読者が出てきている。エリカ・フリードマン（Friedman, 2017）は、百合マンガの女性読者が持つ流動性を指摘する。百合とレズビアンを同一視する読者もいれば、ジェンダーを超越した愛として百合マンガを捉える読者もおり、さらには、百合マンガの恋愛を女性が別の女性に対して抱く、深いけれども性的ではない憧れと解釈する読者もいる。百合マンガの物語における女性間の関係は、同性間の友情から同性愛までの幅を持った連続体として提示されており（概してセックスシーンは露骨に描かれない）、そのため、作中キャラクターに性的欲望を認めるのか、あるいは単に深い情緒的な繋がりだけを見るのか、読者には選択の余地がある。女性向けポルノにおいても、恋愛は肉体的なセックスと同じくらい重要である（Nagaike, 2010）。そして、読者が望めば、セックスそのものも、むしろ感情表現の要素が強いと解釈することも可能となるのだ。百合マンガ研究は、日本の女性ポップカルチャーが（性的欲望の中でさえ）感情を強調し、性的志向と戯れる「安全な空間」を提供する、という傾向を繰り返し指摘している。

ボーイズラブ――作中キャラクターとファンの性的志向、性的欲望

ＢＬは、セクシュアリティとの戯れという点で、上述のポップカルチャー形式それぞれと繋がる。レディコミや女性ポルノと同じく、ＢＬには極めて露骨なものもある。宝塚やアイドルのファンと同じく、《美少年》の美学を展開し、ロマンティックで「ソフトな」男性性を重視する。また、百合マンガにも見られるように、ＢＬの様式と内容は、性的志向に関して多様な解釈を可能にする。しかし、他の形式とは違って、ＢＬのマンガやアニメは学術研究の世界で注目されており、日本国内においても国際的にも多種多様の研究が発表されている。一九九〇年代、日本のいわゆる「ゲイ・ブーム」を背景に、このジャンル自体が急成長したせいかもしれない――実際、ＢＬの男性ファンについての調査が増えてきているが、これは本稿の範囲外となるテーマである。この最後のセクションでは、特に女性のセクシュアリティと関わるＢＬへの主要な学術的アプローチをいくらか検討したい。

ＢＬは一九七〇年代に発展した。少女マンガから生まれたＢＬの初期作品には、「花の二四年組」による当時の少女マンガ作品と同じ特徴がいくつも見られる――例えば、池田理代子『ベルサイユのばら』（一九七二―七三）にあるような、ヨーロッパの歴史的背景、美しい両性具有的主人公、メロドラマ的・悲劇的な結末など。それ以降、ＢＬは巨大な産業へと成長しており、一般流通マンガ（男子学生のプラトニックな物語から成人向けＳＦやファンタジーまで）、オンラインやコミケのようなイベントで売買される同人誌、アニメ、テレビドラマ、ライトノベル、ビジュアルノベルゲームなど多岐に渡る。研究者はこれらの媒体のほとんどを詳細に調査し（ただし、ライトノベルとＢＬゲームに関する調査は少ない）、また、「腐女子」「腐男子」を自称するＢＬファンについても詳しい研究がある。研究者はまた、ジェンダー問題、日本及び海外におけるＢＬ、そしてもちろん、セクシュアリティも視野に入れている。

いくつもの研究が、テクストの内容分析に回帰し、ＢＬの特徴的な様式と物語が、読者側からある種の解釈を引き出すことを解明している。このような研究は、少女マンガ、ＢＬ、百合マンガの過去の関連をたどり、特に、ロマンティックな場面、あるいは性的な場面における作中キャラクターの両性具有的美学によって、女性読者が自分自身の同性愛欲望を探検しているのかもしれない、と論じる（Fujimoto, 2004）。長池（Nagaike, 2010）は、多くの百合マンガ作家が、まずＢＬでキャリアを築いている点を指摘する（どちらのジャンルも異性愛規範（ヘテロノーマティヴィティ）を拒絶している）。ＢＬ分野の泰斗、ジェイムズ・ウェルカーの考えでは、『風と木の

詩』（竹宮惠子、一九七六―八四）や『トーマの心臓』（萩尾望都、一九七四）のような初期作品は、支配的な異性愛物語を揺さぶるという意味で、男装する女性の登場する少女マンガと似た機能を果たしている。長池（Nagaike, 2010）も支持するこの解釈は、「女性化した美少年に感情移入することによって、読者は標準外のジェンダーや性行為を想像上で試すように促される」としている（Welker, 2006, p. 852）。初期のＢＬ作家は、自作をホモセクシュアルと明白に結びつけることを慎重に避けていたが、ふたりの両性具有的キャラクター間の恋愛を見ると、読者によってはレズビアン解釈も可能であった。こうして、この若い男性だらけのジャンルに、「日本の若い同性愛の女性、あるいはトランスジェンダーの女性は、自分のための空間を求めた」（Welker, 2008, p. 47）。

藤本由香里は、ＢＬこそが少女マンガの「最大の功績」であると述べる（Fujimoto, 2004, p. 83）。その大きな理由のひとつは、若い女性向けメディアの領域に、堂々とセックスのイメージを持ち込んだことにある。一九七〇年代以前の少女マンガの性描写は控えめで、露骨に描かれる前にフェードアウトしていた。しかし、ＢＬは女性が性的な妄想を持っていることを公然と認め、その需要に応じた題材を提供したのだ――守如子は、その著書『女はポルノを読む』（2010, p. 86）において、「ハードＢＬ」を論じながら、そう強調する。こうして、別の研究では、ＢＬのポルノグラフィーに潜在するセクシュアリティとの戯れに焦点を当てる。藤本が主張するように、八〇年代に遡るＢＬの露骨な性描写は、他の女性ポップカルチャー形式を特徴づける性的な「遊び」を可能にする（Fuiminoto, 2004, p. 86）。初期のＢＬ研究は、ＢＬのセックスを単純な異性愛のメタファー――積極的な「攻め役」（挿入する側）が男性で、「受け役」（挿入される側）が服従的な女性の代わりとなる――の枠にはめようとする傾向があった（Penley, 1992; Matsui, 1993）。このような、ＢＬ作者がジェンダーの不平等を受動的に再生産しているという解釈は、ＢＬに潜在する破壊性を否定することとなった。この破壊性については、後の研究者が論じることになる。

別の研究者にとっては（Stanley, 2010）、双方のキャラクターがはっきりと男性として描かれているという事実こそが重要である。男性カップルを描くことによって、女性読者が、現実世界の男女関係における（しばしば不均衡な）ジェンダー力学から距離を置くことを可能にしている、と主張する研究者もいる。そのため、レディコミに見られる妄想レイプと同様の過激なＢＬの消費者は、問題含みの「支配する男性・従属する女性」モデルにＢＬをはめることなく（Okabe & Pelletier-Gagnon, 2019）、「地位や権力の違いが生む潜在的エロティシズムと戯れることができる」（Stanley, 2010, p. 104）。

また別に、ＢＬのセックスシーンが、ジェンダーを超越した性愛を提示していると考える研究者もいる。日本のゲイ研究、ＢＬ研究の権威のひとり、マーク・マクレランドの考えでは、キャラクターが両性具有的であるため、読者側からすれば、性差の境界を侵犯する解釈が可能となる。読者は「攻め役」にも「受け役」にも感情移入することができる。女性向け実写ポルノでも見られたように、どちらの人物にも等しく視覚的フォーカスが与えられているのだ。このように複数の性的視点を持つ可能性は、「あらゆる一枚岩（モノリシック）的な性差の理解」に挑戦する（Wood, 2006, p. 397）。アカツカに言わせれば（Akatsuka, 2010）、キャラクターがゲイなのかストレートなのかを明確にしないという事実こそが、異性愛的二項対立に対する最も強い反抗となっている。つまり、両性具有的キャラクター間の性行為に識別ラベルを貼るのを拒絶することによって、多様な解釈が開かれるのである。

これまで見てきた諸研究は、複雑なＢＬ研究のほんの一面である。ＢＬが世界の様々な地域で、様々な受容者に、様々な目的で解釈される、という状況を扱った多種多様な研究が発表されている。しかし、女性向け実写ポルノと同様、読者がＢＬをどのように使用しているかを具体的に示すという点に関しては、あまり調査されていない。単に性規範と戯れているだけなのか、あるいは、ＢＬにも刺激と肉体的快楽を与える情動機能があるのだろうか？　あるいは、まったく違う機能があるのだろ

うか？　このような論点に関する新しい研究は、主に「腐女子」研究の人類学／社会学分野の中で始まっている。英語での研究で、こうした分野を牽引しているのは、パトリック・ガルブレイスのような研究者である。ガルブレイスによる「腐女子」コミュニティと情動を扱った著作（Galbraith, 2015）は、女性ポップカルチャーがセクシュアリティの実践という点で具体的にどのように使用されているのか、さらなる調査の必要性を示している。こうした点は、ごく最近になって目を向けられるようになった。例えば、クリスティン・サントスの研究では、BLの消費者が、一般的ポルノの様式や慣例について知識を増やしている点が論じられている（Santos, 2020）。さらに多くの調査が待たれる。

BL文化の諸相の全体像は、マクレランド、長池、菅沼、ウェルカー共同編纂の論集（McLelland, Nagaike, Suganuma, and Welker eds., *Boys Love Manga and Beyond: History, Culture, and Community in Japan* [2015]）で得られる。これと同じような論文集、二〇一〇年発刊の *Boys' Love Manga: Essays on the Sexual Ambiguity and Cross-Cultural Fandom of the Genre*（ed. Levi, McHarry, and Pagliassoti）、それに、日本語の『BLが開く扉――変容するアジアのセクシュアリティとジェンダー』（二〇一五、ウェルカー編）が示しているように、日本の女性ポップカルチャーにおけるセクシュアリティの機能を十分に解明するためには、日本人の視点と国際的な視点、テクストと実践両方の分析、そして幅広い多種の研究領域が交わる必要がある。日本において様々な媒体が交錯し続けている今、女性ポップカルチャー研究は、あらゆる面を網羅・統合することが求められている。

参照文献

Akatsuka, N. K. (2010). Uttering the Absurd, Revaluing the Abject: Femininity and the Disavowal of Homosexuality in Transnational Boys' Love Manga. In D. Pagliassotti, M. McHarry, & A. Levi (Eds.), *Boys' Love Manga: Essays on the Sexual Ambiguity and Cross-Cultural Fandom of the Genre* (pp. 159–176). McFarland & Company.

Allison, A. (1996). *Permitted and Prohibited Desires: Mothers, Comics, And Censorship In Japan*. Avalon Publishing.

Aoyagi, H. (2005). *Islands of Eight Million Smiles: Idol Performance and Symbolic Production in Contemporary Japan (Harvard East Asian Monographs)*. Harvard University Asia Center.

Aoyama, T. (1988). Male Homosexuality as Treated by Japanese Women Writers. In Y. Sugimoto & G. McCormack (Eds.), *Modernization and Beyond: The Japanese Trajectory* (pp. 186–204). Cambridge University Press.

Aoyama, T. (2005). Transgendering shojo shosetsu: Girls' inter-text/sex-uality. In R. Dasgupta & M. McLelland (Eds.), *Genders, Transgenders and Sexualities in Japan* (pp. 49–64). Routledge. https://doi.org/10.4324/9780203346839

Carriger, M. L. (2018). "Maiden's Armor": Global Gothic Lolita Fashion Communities and Technologies of Girly Counteridentity. *Theatre Survey*, *60*(1), 122–146. https://doi.org/10.1017/s0040557418000522

Darling-Wolf, F. (2003). Male Bonding and Female Pleasure: Refining Masculinity in Japanese Popular Cultural Texts. *Popular Communication*, *1*(2), 73–88. https://doi.org/10.1207/s15405710pc0102_1

Friedman, E. (2017). On defining *yuri*. *Transformative Works and Cultures*, *24*. https://doi.org/10.3983/twc.2017.0831

藤本由香里（一九九二）女の欲望のかたち レディースコミックにみる女の性幻想。白藤花夜子（編）、『ニュー・フェミニズム・レビュー3　ポルノグラフィー――揺れる視線の政治学』（七三―七四頁）。学陽書房。

Fujimoto, Y. (2004). Transgender: Female Hermaphrodites and Male Androgynes. *U.S.-Japan Women's Journal*, *27*, 76–117.

Galbraith, P. (2015). Moe Talk: Affective Communication among Female Fans of Yaoi in Japan. In J. Welker, K. Suganuma, K. Nagaike, & M. Mclelland (Eds.), *Boys Love Manga and Beyond: History, Culture, and Community in Japan* (pp. 153–168). University Press of Mississippi.

Glasspool, L. (2012). From Boys Next Door to Boys' Love: Gender Performance in Japanese Male Idol Media. In P.W. Galbraith & J. G. Karlin (Eds.), *Idols and Celebrity in Japanese Media Culture* (pp. 113–130). Palgrave Macmillan.

Hambleton, A. (2015). When women watch: the subversive potential of female-friendly pornography in Japan. *Porn Studies*, *3*(4), 427–442. https://doi.org/10.1080/23268743.2015.1065203

Helm, K. (2017). Women's Pleasure Online? A Contrasting Analysis of One Japanese Mainstream and One Women's Pornographic Film from the Internet. *Vienna Journal of East Asian Studies*, *8*(1), 33–64. https://doi.org/10.2478/vjeas-2016-0002

Ito, K. (2002). The World of Japanese Ladies' Comics: From Romantic Fantasy to Lustful Perversion. *The Journal of Popular Culture*, *36*(1), 68–85. https://doi.org/10.1111/1540-5931.00031

Jones, G. (2002). "Ladies" Comics': Japan's Not-So-Underground Market in Pornography

for Women. *US-Japan Women's Journal English Supplement*, *22*, 3–30.

Jones, G. (2005). Bad Girls Like to Watch: Writing and Reading Ladies' Comics. In J. Bardsley & L. Miller (Eds.), *Bad Girls of Japan* (pp. 97–110). Palgrave Macmillan.

Juffer, J. (1998). *At Home with Pornography: Women, Sexuality, and Everyday Life* (Illustrated ed.). NYU Press.

Kinsella, S. (1995). Cuties in Japan. In B. Moeran & L. Skov (Eds.), *Women, Media, and Consumption in Japan* (pp. 220–254). University of Hawaii Press.

Kinsella, S. (2000). *Adult Manga: Culture and Power in Contemporary Japanese Society (ConsumAsian Series)*. Routledge.

Koma, K. (2013). Kawaii as Represented in Scientific Research: The Possibilities of Kawaii Cultural Studies. *Hemispheres: Studies on Cultures and Societies*, *28*, 103–117.

Matsui, M. (1993). Little girls were little boys: Displaced femininity in the representation of homosexuality in Japanese girls' comics. In S. N. Gunew & A. Yeatman (Eds.), *Feminism and the Politics of Difference* (pp. 177–196). Allen & Unwin.

McLelland, M. (2005). The World of Yaoi: The Internet, Censorship and the Global 'Boys' Love' Fandom. *Australian Feminist Law Journal*, *23*(1), 61–77. https://doi.org/10.1080/13200968.2005.10854344

Mendelsohn, K. (2014). Gender in Fandom. *Applied Psychology Opus*, *Fall*. https://wp.nyu.edu/steinhardt-appsych_opus/gender-in-fandom/

MILLER, L. (2011). Cute Masquerade and the Pimping of Japan. *International Journal of Japanese Sociology*, *20*(1), 18–29. https://doi.org/10.1111/j.1475-6781.2011.01145.x

Monden, M. (2013). The "Nationality" of Lolita Fashion. In O. Krischer, M. Perkins, & F. Nakamura (Eds.), *Asia Through Art and Anthropology: Cultural Translation Across Borders* (pp. 165–178). Bloomsbury Academic.

守 如子（二〇一〇）『女はポルノを読む：女性の性欲とフェミニズム』青弓社。

Nagaike, K. (2010). The Sexual and Textual Politics of Japanese Lesbian Comics: Reading Romantic and Erotic Yuri Narratives. *Electronic Journal of Contemporary Japanese Studies*, *4*.

Nagaike, K. (2012). Johnny's Idols as Icons: Female Desires to Fantasize and Consume Male Idol Images. In J. G. Karlin & P. W. Galbraith (Eds.), *Idols and Celebrity in Japanese Media Culture* (pp. 97–112). Palgrave Macmillan.

Nagaike, K., Ogi, F., & Berndt, J. (Eds.). (2019). *Shōjo Across Media Exploring "Girl" Practices in Contemporary Japan*. Palgrave Macmillan.

Nagaike, K., & Suganuma, K. (2013). Transnational boys' love fan studies. *Transformative Works and Cultures*, *12*. https://doi.org/10.3983/twc.2013.0504

Okabe, T., & Pelletier-Gagnon, J. (2019). Playing with Pain. *Journal of the Japanese Association for Digital Humanities*, *4*(1), 37–53. https://doi.org/10.17928/jjadh.4.1_37

Penley, C. (1992). Feminism, Psychoanalysis, and the Study of Popular Culture. In L. Grossberg (Ed.), *Cultural Studies* (pp. 479–500). Routledge.

Robertson, J. (1998). *Takarazuka: Sexual Politics and Popular Culture in Modern Japan* (First ed.). University of California Press.

Santos, K. M. L. (2020). The bitches of Boys Love comics: the pornographic response of Japan's rotten women. *Porn Studies*, *7*(3), 279–290. https://doi.org/10.1080/23268743.2020.1726204

Schodt, F. L. (1983). *Manga! Manga!: The world of Japanese comics* (1st ed.). Kodansha International.

Schodt, F. L. (1996). *Dreamland Japan: Writings on Modern Manga* (1st ed.). Stone Bridge Press.

Shamoon, D. (2004). Office Sluts and Rebel Flowers: The Pleasures of Japanese Pornographic Comics for Women. In L. Williams (Ed.), *Porn Studies* (pp. 77–103). Duke University Press Books.

Stanley, M. (2010). 101 Uses for Boys: Communing with the Reader in Yaoi and Slash. In D. Pagliassotti, M. McHarry, & A. Levi (Eds.), *Boys' Love Manga: Essays on the Sexual Ambiguity and Cross-Cultural Fandom of the Genre* (pp. 99–109). McFarland & Company.

Thorn, M. (2001). Shôjo Manga—Something for the Girls. *The Japan Quarterly*, *48*(3).

Thorn, M. (2004). Girls and Women Getting Out of Hand: The Pleasure and Politics of Japan's Amateur Comics Community. In W. W. Kelly (Ed.), *Fanning the Flames: Fans and Consumer Culture in Contemporary Japan* (pp. 169–186). State University of New York Press.

Welker, J. (2006). Beautiful, Borrowed, and Bent: "Boys' Love" as Girls' Love in Shôjo Manga. *Signs: Journal of Women in Culture and Society*, *31*(3), 841–870. https://doi.org/10.1086/498987

Welker, J. (2008). Two Lilies of the Margin: Beautiful Boys and Queer Female Identities in Japan. In A. Yue, M. McLelland, P. Jackson, & F. Martin (Eds.), *AsiaPacifiQueer: Rethinking Genders and Sexualities* (pp. 46–66). University of Illinois Press.

J・ウェルカー（編）（二〇一五）『BLが開く扉——変容するアジアのセクシュアリティとジェンダー——』青土社。

Williams, L. (1989). *Hard Core: Power, pleasure, and the "frenzy of the visible"* (1st ed.). University of California Press.

Wood, A. (2006). "Straight" Women, Queer Texts: Boy-Love Manga and the Rise of a Global Counterpublic. *Women's Studies Quarterly*, *34*(1/2), 394–414.

Yamanashi, M. (2012). *A History of the Takarazuka Revue Since 1914: Modernity, Girls' Culture, Japan Pop*. Global Oriental/Brill.